



# ヨコハマトリエンナーレ 2014

## YOKOHAMA TRIENNALE 2014

---

第1回 記者会見資料

---

### 開催概要

### アーティストック・ディレクター発表

---

日時：2012年12月18日(火) 14:00～15:00

会場：横浜美術館 円形フォーラム

---

**本資料についてのお問い合わせ** ※掲載画像のご請求は、下記宛先までご連絡ください。

---

横浜トリエンナーレ組織委員会事務局（担当：花形、山本）  
〒220-0012 横浜市西区みなとみらい3-4-1 横浜美術館内  
TEL 045-663-7232 FAX 045-681-7606  
E-MAIL [press@yokohamatriennale.jp](mailto:press@yokohamatriennale.jp)  
URL <http://www.yokohamatriennale.jp>



## 「ヨコハマトリエンナーレ 2014」の 開催概要とアーティストック・ディレクターを決定しました

横浜トリエンナーレ第5回展となる「ヨコハマトリエンナーレ2014」は、アーティストック・ディレクターに美術家の森村泰昌氏を迎え、2014年8月から11月に開催します。

2001年に「新たな文化創造」を期して始まった横浜トリエンナーレは、これまで4回開催し、時代を捉えたテーマのもと、新進アーティストから国際的に活躍するアーティストまで幅広い作品を紹介してきました。2011年以降、日本人の意識が大きく変わったといわれるなか、アーティストの柔軟な発想と視点こそが私たちの生き方や考え方を捉え直すヒントとなり、指針となるのではないかという期待のもと、「ヨコハマトリエンナーレ2014」のアーティストック・ディレクターを、森村氏に依頼する運びとなりました。

開港以来、さまざまな文化を積極的に取り入れてきた横浜では、2004年に創造都市政策が策定され、文化芸術が持つ力を活かしたまちづくりを推進してきました。横浜トリエンナーレは、そのリーディングプロジェクトとして位置づけられています。「ヨコハマトリエンナーレ2014」は、これまでの実績を踏まえつつ、アートを通してこれからの時代に必要な新しい価値を追求し、世界とつながる回路を広げていくことを目指します。

「ヨコハマトリエンナーレ2014」に多くの方のご賛同・ご協力をいただきたく、貴社媒体でご紹介くださいますよう、よろしくお願い申し上げます。

横浜トリエンナーレ組織委員会

### ヨコハマトリエンナーレ 2014 開催概要

**名 称**：ヨコハマトリエンナーレ2014

**会 期**：2014年8月上旬～11月上旬 ※会期の詳細・休場日は、決定次第お知らせします。

**主会場**：横浜美術館、新港ピア（新港ふ頭展示施設）

**主 催**：横浜市、(公財)横浜市芸術文化振興財団、NHK、朝日新聞社、横浜トリエンナーレ組織委員会

**アーティストック・ディレクター**：森村泰昌（もりむら やすまさ）

※事業の総称および組織名は「横浜トリエンナーレ」（横浜＝漢字表記）、第5回展の事業名は「ヨコハマトリエンナーレ2014」（ヨコハマ＝カタカナ表記）となります。

## アーティストック・ディレクター 森村泰昌（もりむら やすまさ）



### 芸術の良心、未知の芸術

行き先は未知である。しかし横浜から舟は出港した。その船長が私だとしたら、正直なところ、舵取りはかなり危険である。

美術家である私は、国際展のアーティストック・ディレクターを務めた事など、一度もない。はじめて舵輪を握るのであり、しかもどのように操舵するのか、練習もないまま舟は出港したのである。

しかし、このいささか無謀とも思える船出こそ、今、国際展には必要とされているのではないだろうか。2000年代に入り、国際展は国内外問わず、各所で我も我もと立ち上げられて、すでに物珍しい催事ではなくなった。単に大きいだけの規模。楽しいだけのお祭り騒ぎ。単純なポピュリズム、グローバリズム、ローカリズム。芸術世界への市場原理の強すぎる影響などが目立ち、関係者のみならず、観客のほうからも、これでいいのだろうかという疑問の声が、まだ少数派かもしれないが、そろそろ出始めているのではないか。

私は原理主義者ではないので、芸術はこうあるべきだと一方的に決めつけたくはない。堅苦しい枷をはめて、それに合致しない作品はすべて排除するなどという不自由は選択しない。だが、なんでもありというのでは困る。自由な表現の場を確保しつつ、これだけはキープしたいという信念は捨てないでおきたい。では私が捨てず持ち続けたい信念とは何か。それは「芸術の良心」というものである。もし芸術の神様がいるとすれば、その神様に捧げる芸術作品が、なんら恥じる事のない供物であってほしいという願いである。

かくのごとく、アーティストック・ディレクターという重責を担った経験のない私は、ほとんど理想主義者としての夢を語るにすぎず、それは、現実という名の向かい風といかに上手くつき合うかが成功の決め手と知るプロのキュレーターたちからは、甘いと言われるかもしれない。確かに、夢や理想だけが価値基準である美術家の兎戯じみた舵取りは、いかにも危うい。だがこの初心者の危うさを、忘れかけている冒険心と捉えなおし、芸術世界の未知数に向かって新鮮な気構えで旅に出る。これはこれで、重要な提案を必ずや孕むだろう。

約2年間の長旅となるが、好奇心と愛情をもって、じっくりと見守っていただきたい。よろしく願いいたします。



## 森村泰昌／略歴

1951年、大阪市生まれ、同市在住。京都市立芸術大学美術学部卒業、専攻科修了。

1985年、ゴッホの自画像に扮したセルフポートレート写真を発表。以後、一貫して「自画像的作品」をテーマに、美術史上の名画や往年の映画女優、20世紀の偉人たちに扮した写真や映像作品を制作している。

1988年、第43回ヴェネチア・ビエンナーレ、アペルトに出品したほか、国内外で多数の展覧会に出品している。

主な個展に、「美に至る病—女優になった私」(横浜美術館、1996年)、「空装美術館—絵画になった私」(東京都現代美術館、他2館、1998年)、「私の中のフリーダ／森村泰昌のセルフポートレート」(原美術館、2001年)、「美の教室、静聴せよ」(熊本市現代美術館、横浜美術館、2007年)、「Requiem for the XX Century. Twilight of the Turbulent Gods」(La Galleria di Piazza San Marco、ヴェネチア、他ニューヨーク、パリに巡回、2007、2008年)、「なにものかへのレクイエム—戦場の頂上の芸術」(東京都写真美術館、他3館、2010、2011年)など。文筆活動も精力的に行っており、近著に『森村泰昌「全女優」』(二玄社、2010年)、『まねぶ美術史』(赤々舎、2010年)、『対談集 なにものかへのレクイエム—20世紀を思考する』(岩波書店、2011年)など。

2006年度京都府文化賞・功労賞、2007年度芸術選奨文部科学大臣賞、2011年に第52回毎日芸術賞、日本写真協会賞・作家賞、第24回京都美術文化賞の各賞を受賞。同年、秋の紫綬褒章を受章。

## アーティストック・ディレクターの選定について

横浜トリエンナーレ組織委員会では、特別委員会として「アーティストック・ディレクター選定委員会」を設置し、森村泰昌氏を選定しました。

### アーティストック・ディレクター選定委員会 (五十音順)

委員長 高階秀爾 大原美術館 館長

委員 逢坂恵理子 横浜美術館 館長

帯金章郎 朝日新聞社 企画事業本部文化事業部企画委員

倉森京子 NHKエデュケーショナル 特集文化部(美術)部長 プロデューサー

建畠 哲 京都市立芸術大学 学長

## 主会場について

「ヨコハマトリエンナーレ2014」は、横浜美術館と新港ピアを主会場として開催します。

横浜トリエンナーレはこれまで、横浜赤レンガ倉庫、日本郵船海岸通倉庫、山下ふ頭など、港を臨む横浜らしいさまざまなロケーションを会場として開催してきました。

第4回展(2011年)からは、同一会場での継続的な開催を目指し、横浜美術館が主会場のひとつとなりました。横浜美術館は、19世紀後半から現代にかけての国内外の美術を中心に1万点余りの作品を収蔵している横浜を代表する文化施設です。

一方新港ピア(新港ふ頭展示施設)は、第3回展(2008年)の主会場として建設されました。現在は、アーティストやクリエイターなどのインキュベーション施設として活用されています。

美術専門施設としての高度な機能を持つ美術館と、オープンで自由な展示の可能性が広がる倉庫型施設という性格の異なる2つの空間を使い、多様な表現を持つ幅広い現代美術作品を紹介します。

### 横浜美術館

設計：丹下健三／丹下健三・都市・建築設計研究所

竣工：1989年

構造規模：鉄骨・鉄筋コンクリート造、延床面積26,829m<sup>2</sup>

所在地：横浜市西区みなとみらい3-4-1



撮影：笠木靖之

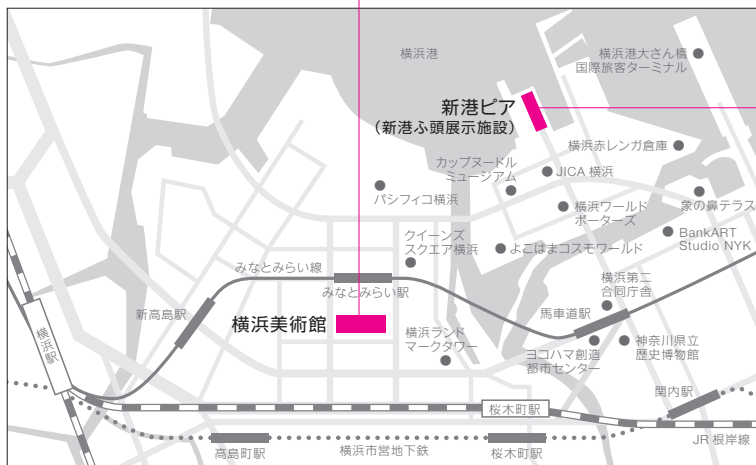
### 新港ピア(新港ふ頭展示施設)

設計：松本陽一設計事務所

竣工：2008年

構造規模：鉄骨造、平屋建て4室、延床面積4,400m<sup>2</sup>

所在地：横浜市中区新港2-5



### 交通アクセス

#### 横浜美術館

みなとみらい線(東急東横線直通)みなとみらい駅下車、5番出口より徒歩5分。  
JR線および横浜市営地下鉄桜木町駅下車、「動く歩道」を利用、徒歩10分。

#### 新港ピア(新港ふ頭展示施設)

みなとみらい線「馬車道駅」より徒歩13分。



## これまでの開催実績

開催年	2001年(第1回)	2005年(第2回)	2008年(第3回)	2011年(第4回)
テーマ	メガ・ウェイブ —新たな総合に向けて	アートサーカス [日常からの跳躍]	TIME CREVASSE タイムクレヴァス	OUR MAGIC HOUR —世界はどこまで知ることができるか?—
ディレクター／ キュレーター	[アーティストティック・ディレクター] 河本信治 建島 哲 中村信夫 南條史生	[総合ディレクター] 川俣 正  [キュレーター] 天野太郎 芹沢高志 山野真悟	[総合ディレクター] 水沢 勉  [キュレーター] ダニエル・バーンバウム フー・ファン 三宅暁子 ハンス・ウルリッヒ・オプリスト ヘアトリクス・ルフ	[総合ディレクター] 逢坂恵理子  [アーティストティック・ディレクター] 三木あき子
会期	9月2日～11月11日 (67日間)	9月28日～12月18日 (82日間)	9月13日～11月30日 (79日間)	8月6日～11月6日 (83日間)
主会場	[2会場] ・パシフィコ横浜展示ホール ・横浜赤レンガ倉庫1号館	[1会場] ・山下ふ頭3・4号上屋	[4会場] ・新港ピア ・日本郵船海岸通倉庫 (BankART Studio NYK) ・横浜赤レンガ倉庫1号館 ・三溪園	[2会場] ・横浜美術館 ・日本郵船海岸通倉庫 (BankART Studio NYK)
参加作家数	109作家	86作家	72作家	77組(79作家)/1コレクション
総事業費	約7億円	約9億円	約9億円	約9億円
総入場者数(有料入場者)*	約35万人(約15万人)	約19万人(約16万人)	約55万人(約31万人)	約33万人(約30万人)
チケット販売枚数	約17万枚	約12万枚	約9万枚	約17万枚
ボランティア登録者数	719人	1,222人	1,510人	940人
主催者	国際交流基金 横浜市 NHK 朝日新聞社 横浜トリエンナーレ組織委員会	国際交流基金 横浜市 NHK 朝日新聞社 横浜トリエンナーレ組織委員会	国際交流基金 横浜市 NHK 朝日新聞社 横浜トリエンナーレ組織委員会	横浜市 NHK 朝日新聞社 横浜トリエンナーレ組織委員会 共催:(公財)横浜市芸術文化振興財団

※入場者数は延べ人数

## 横浜トリエンナーレ組織委員会 (2012.12.18 現在)

横浜トリエンナーレ組織委員会	
名誉会長 代表	林 文子(横浜市長) 澄川喜一(〔公財〕横浜市芸術文化振興財団理事長) 松本正之(NHK会長) 木村伊量(朝日新聞社社長)
委員 委員長	逢坂恵理子(横浜美術館館長) 中山こずゑ(横浜市文化観光局長) 風谷英隆(NHK事業部長) 町田智子(朝日新聞社企画事業担当) 櫻井友行(〔独法〕国際交流基金理事)
外部有識者	高階秀爾(大原美術館館長) 建島 哲(京都市立芸術大学学長) 宮田亮平(東京藝術大学学長)
アーティストティック・ディレクター(AD)	森村泰昌
オブザーバー	佐藤 透(文化庁長官官房国際課長)
監事	渡辺好史(税理士)

事務局	
開催本部長	矢野修司(横浜市)
事務局長	帆足亜紀(〔公財〕横浜市芸術文化振興財団)
事務局次長	高橋三男(横浜市) 天野太郎(〔公財〕横浜市芸術文化振興財団) 福山浩一郎(NHK) 帯金章郎(朝日新聞社)